

阪大 ー地域に生き世界に伸びるー

NOW



OSAKA UNIVERSITY 2010/No.115

1



大阪大学の「あさって」のために

ー年頭所感2010ー 大阪大学総長 鷺田 清一

大阪大学の「あさって」のために

-- 年頭所感 2010 --

みなさま、明けましておめでとうございます。

年の瀬にこのご挨拶を綴っている時点で、来年度の予算はまだ決まっていません。そんな中途半端な状態でわたしたちは新しい年を迎えつつあります。このようなかたちで年を越しつつあるのは、いうまでもなく、昨秋政府による「事業仕分け」がおこなわれ、そのなかで国立大学法人の予算や、種々の研究関係予算の削減が俎上にのぼったことによります。



「事業仕分け」をめぐる

この削減方針に対しては、国公立大学の関係者から学会や有識者団体、さらには若手研究者まで、多くの「異議」もしくは「陳情」の声があがりました。大阪大学総長としてわたしもまた「事業仕分け」に何度か公式に異議を唱えるとともに、個人として月々の思いを連載させていただいているある新聞に、異例と承知しつつも、「事業仕分け」を仕分ける必要」という題で次のような文章を書かせてもらいました。少し長くなりますが、以下、まずはそれを再録させていただきます。

この欄では、これまでずっと、ひとりの書き手として気ままに文章を書かせていただけてきました。が、このたび一度かぎり、わたくしの社会的な役割において書かせていただくことをお許し願いたいと思います。

わたくしはある国立総合大学の学長職にあります。このたびの「事業仕分け」にあっては、国立大学法人の運営のあり方もその俎上に上りました。

国の政策の点検が、国民に公開されるかたちでなされるこの「事業仕分け」は、わが国の政治史上でも画期的な意味をもつものだと思っています。また、「天下り」や「基金隠し」といった組織の悪弊を摘出し、あたらかぎりの節約を試みるとい

うのもまったくもって正しいものです。

しかし一歩立ち止まって、「事業仕分け」の議論というのは、一律に予算を切りつめるだけのものではなく、この国を将来どのような方向にもってゆくのか、この国にいまいちばん必要なものは何かを判断するためにあるはずで、この国がおこなう事業の何を伸ばし、何を断念するかを選択は、短期的な視点からのみ決してはならないものです。

大学の使命は、高等教育と学術研究をつうじて人類の幸福と安寧とに貢献するというものです。「事業仕分け」の作業のなかでその予算が大幅に削減されることになった研究についていえば、いずれの科学研究にも、仮説、実験、検証の長い道のりがあります。いいかえれば、一つの画期的な科学的発見、技術開発の背後には、夥しい数の失敗や挫折があります。失敗例を無数に重ねてゆくなかで、最終的な発見・発明への細い道がかるうじて見えてくるという性質のものなのです。そして一つの優れた研究というのは、ある意味日陰にあって厚い層をなす研究者たちの切磋琢磨のなかではじめて生まれてくるものです。

さて、資源小国であるわが国にとって、国力の基盤は 知恵 と 技 にあることは明治のころ

から気づかれていました。だからこそ、科学と技術を振興し、産業と貿易とで立国するために、時の政府は、あの世界の激動のなかで、軍事費に匹敵するくらいの予算を基礎研究と教育とに注ぎ込みました。

国の知的基盤を支えるという使命をもつ国立大学は、いまから5年前、平成16年に法人化されました。法人とはいえ、国からの指示で業務が決まる独立行政法人とは異なって、独自の構想にもとづいて研究と教育を担い、それについて国の認可を受けるという仕組みになっています。しかし、法人化後、国からいただく大学運営のための基礎的な経費は、毎年1%の割合で削減されてきました。法人化によってそれまで国に委せていた業務の多くが各国立大学法人へと移管され、大学の仕事量は大きく膨らみましたが、経費のほうは総額で720億円減額されてきました。これは軒並み研究・教育予算を大幅に増額している先進国中では例外的なものです。

もちろん国の財政難については、だれしもよく承知しており、大学でもこの間、業務の拡大と運営費の減額というジレンマのなかで、人件費を圧縮し、ありとあらゆる無駄を洗いだし、カラーコピーはやめ、封筒は使い回すというふうに、企業であたりまえにやっていることを同じようにやってきました。外部評価にもとづく「事業仕分け」はすでに始まっておりました。(ちなみにわたくしの大学では、運転手さんは20年ほど前にはおよそ30人おられました。法人化時に2人にまで削減し、来年からはいよいよゼロになります。事務職員数もほぼ同じ期間に半数に減らしました。)

しかしそれもそろそろ限界に達しつつあります。業務の増加に反比例して人員削減をおこなってきたために、教員も教育・研究以外の業務に巻き込まれ、論文数も減っています。貧弱な環境、難しい就労条件に、若手の研究者や医師のこころも挫けつつあります。

ためらいとともに

しかしこのとき同時に、このような文章を綴りながらも、このようなかたちで声をあげることに幾ばくかのためらいを引きずっていたことも、あえて告白せざるをえません。

「事業仕分け」は、現場の声を聴くことなく、現場を所轄する官僚を、仕分け人と財務官僚とが問いつめるというかたちで進められました。それに対して学術関係者は次々に疑問の声をあげましたが、たとえば厚生労働省の「若者自立塾」の廃止などについては、当事者であるニートの若者たちや就業支援の人たちは、声すら届けられません。ただ悲鳴をあげるだけです。

痛みは分かたれねばなりません。これからも大学は、いかに苦しい状況にあってもぜったいに棄ててはならないものを確認しつつ、必死の工夫を重ねていきます。けれども、わたくしたちはどういう展望のなかで苦境に耐えるのか、納得してそれをしたいのです。大学はまた、どのような事業が「仕分け」になじみ、何がそれに適さないかの「逆仕分け」をする責任も負っています。そしてそれを、政府のみならず国民各層にも、あくまで学術の立場から訴えていきたいと思っています。

(「北海道新聞」2009年12月3日夕刊)

このとき頭のなかをよぎっていたのは、まずは幾多の研究プロジェクトで任期付きで採用されているポスドクの人たちのこれからがどうなるかであり、また予算の縮減によって大学運営のどの部分をどう削らねばならないかということでした。



この国でいま、寒空の下明日の食事にも不安をおぼえている人たちが数多くおられるなかで、それでも学術予算を削減することはあいならぬとあえて主張しようとすれば、その根拠は何なのか。学術関係

者の「抗議」というより「悲鳴」は、同じように厳しい査定を受けた他の機関や団体のそれらといった点で異なるのか。「仕分け」作業からほんとうの意味での当事者が外されたことに疑義を挟むとして、大学関係者にはそれをなすうる習慣が、あるいはツールがあったが、他方で、微かな声すらあげることのできなかつた当事者たち　たとえば事業の廃止が決定された「若者自立塾」に藁をもつかむような思いで通った若い失職者の人たちと就業支援の人たち　も数多くおられたわけで、そのところの落差をわたしたち大学関係者はどう受けとめたいのか、などなのです。

とりわけ、「国民」の多くがこの件について大学とともに抗議の声をあげたわけではないという歴然たる事実はこたえました。わたしたちは大学が担っている学術研究と高等教育がこの国の将来にとってどれほど大きな意味をもつものかを、これまでほんとうに「国民」の心を動かすようなかたちで語りつづけてきたかと、つよく反省させられました。

大阪大学は法人化後、全国の大学に先がけて、「社会学連携」という考えを打ち出し、それに取り組んできたことは、自負してよい実績だと思っています。たとえば2005年に開設された「大阪大学コミュニケーションデザイン・センター」は、市民の「安全」や「健康」、あるいは「環境」に深くかかわる問題をめぐって、産学官の専門家と一般市民とがインターラクティブに話し合い、問題解決に向けて議論する双方向型のコミュニケーションの諸方式をネット



ワーク化するといった事業を、「サイエンス・カフェ」などのかたちで推進してきました。また、人びとが「市民」として成熟するためのセルフ・ラーニングの場を「大阪大学21世紀懐徳堂」として設置し、地域の人たちを巻き込んでさまざまな集会やワークショップを開催してきました。そこには、自分たちの暮らす地域に「総合大学」があるということにどれほど大きな意味があるかを、それらの活動を通じて実感していただきたいという思いも込められていました。このこと自体は、市民の方々からも、さらには文部科学省や評価機構、そして他の大学からも高く評価していただいてきました。この方面での事業は、他大学にも呼びかけ、さらに全国的なレベルで展開しなければならないでしょう。そうした地道な努力こそが、遠い眼で見て、大学という機関への「国民」からの厚い信頼と支持につながるのだと信じるからです。

ニーズの彼方　あるいは、「あさって」という感覚

大学のこうした活動は、誤解を恐れずにいえば、昨今大学に対してよく求められるような「社会のニーズに応える」活動ではありません。「ニーズ」という考え方で大学の使命を考えるには、その射程距離は短すぎるのです。

科学の研究と技術の発展がこれまで、人類に多大な恵みを与えてきたこと、これは疑いようもありません。それまで、飢え死にさらされていた人類の貧困を救い、治癒できず堪え忍ぶしかなかった難病を克服し、生活上の利便を飛躍的に増大させ、寿命を延ばし、さらには離ればなれになった人と親しく通信するという夢も実現してきました。近代の科学と技術が人類にもたらした福祉と安寧、これは挙げる

ときりがないほどです。しかしこれらに研究者たちは一直線に到達したわけではありません。研究がそ



れらのかたちで結実するには、すでに述べたように、その影で無数の失敗が、無数の試行錯誤があったのです。いいかえると、それらは「社会のニーズに応える」ことから始まったのではないということです。

この間の消息をご理解いただくために、ここでわたしが気にとめている現代日本のアーティストたちの言葉を二つ、引かせていただきたいと思います。「学芸」という言葉があるように、学問と芸術とは、その時代の社会のあり方から一定の距離を置いて、この時代についてこの時代を超える大きなスケールのなかでそれを探究し、表現するいとなみです。だから学問の現在を考えると、芸術が現在試みていることを知ることは、大きなヒントになるはずで

す。それはまず、「あしたのそのつぎに思いを描きます」という日比野克彦さん（東京藝術大学）の言葉です。日比野克彦さんは「アートで地域をつなげるプロジェクト」を推進しておられますが、それに参加したひとたちが手作りで、瓦版のような新聞を発行しておられます。それは「明後日新聞」というもので、その創刊号にこの言葉がありました。ちなみにこの言葉のあとに、「まだ見えていないけど、なんとなく見えるかな、を大切にします」という言葉が続きます。

もう一つは、「アートとは、社会のニーズの先にある感覚を表現するものだ」という言葉です。これは沖縄のあるアートNPOのひとたちの言葉として伝えられています。

さて、ここで、なぜ「明日」ではなく「明後日」なのでしょう。なぜ「社会のニーズ」ではなく「社会のニーズの先にある感覚」なのでしょう。

「あしたのそのつぎ」といっても「その先」といっても、それは、目標を未来に設定して、そしてそこからいますべきことを決めるといった、近代の産業社会の、あの「前のめり」のエートスとは、じつはまったく異質なものです。なぜなら、ここではどうも「未来」として視野に入ってくるものを見よ



うとしているらしいからです。

「明日」や「ニーズ」というものは、今日ここから見えるもの、あるいはせいぜい現時点での視野のなかで最遠点のものにすぎません。だから「目標」として立てることができるし、またその達成のためにしなければならない課題も見えてきます。「中期目標」「年度計画」「達成度評価」といった項目からなる評価制度というのは、そういう視圏のなかでなされるものです。

これに対してアーティストたちは、そういう「明日」に入りきらないものを感じようとします。「明後日」あるいは「ニーズの先にある感覚」という合い言葉で、現在の視圏のその外にまなざしを届けようとしているのです。美術市場、美術教育、そして公共オブジェや都市の装飾など、アートはある面で社会の「ニーズ」に応えうるものですが、アーティストたちはここでむしろ、「ニーズ」のその先にあるセンスを求めようとしているのです。

社会の表層に眼を奪われたり、ムードやイメージで時代を語るのではなく、他のひとたちが抱え込んでいるのと同じ問題に、同じ場所から、しかし別のまなざしを差し込んで取り組み、そこからほんとうの「リアル」を立ち上げさせようというアーティストたちのこの試みを、わたしはここで「(生の)フォーマットを書き換える」とことと言いなおしてみたいと思います。

フォーマットを変える？

「フォーマットを書き換える」こと。学術もまた、そのことに必死に取り組んできました。だれも知らなかったし、想像だにできなかった事実の発見、だれも思い描きだにできなかった技術の発明、それらが科

学、そして文明にその活動の次元変換をもたらし、それらの歴史を前へと突き動かしてきました。いいかえると、「ニーズ」の外にあったもの ということつまり、同時代の人たちからは「無駄なこと」



「無用なこと」とされ、見向きもされなかったことが科学と文明の駆動力になってきたということです。そしてそれが、次の時代の人びとの生のフォーマットを作り、そのフォーマットに添うかたちで人びとの「ニーズ」は作られてきたのです。

だとすれば、「ニーズに応える」のではなく「ニーズの先にある感覚」を見据えるべき大学は、「ニーズ」をそのまま受け容れるのではなく、その「ニーズ」がほんとうに応える「ニーズ」なのかを吟味することからこそ始めなければならないということになります。ある既存のフォーマットにしたがって未来を描くのが「明日」を見ることだとしたら、フォーマットを書き換える作業こそが「明後日」を見ることなのです。

それを可能にするのが、大学で身につけるべき「教養」だとわたしは考えています。「教養がある」とは、わたしなりの定義をすれば、「絶対に見失ってはならないもの」と「あってもいいけどなくてもいいもの」と「端的になくてよいもの」と、そして最後に「絶対にあってはならないこと」とを見分けることができるということです。別の言い方をすれば、どの価値を優先し、どの価値を後に回すか、破棄するかという《価値の遠近法》を身につけているということです。言わずもがなのことですが、いわゆる

気が利くということ

先ほど、「絶対に見失ってはならぬもの」と「あってもいいけどなくてもいいもの」と「端的になくてよいもの」と「絶対にあってはならないこと」とを見分けられるということが「教養がある」ということだと述べました。国立大学法人というこの機関を担う事務職の人たちにあっても、国立大学時代の

「仕分け」にあたってはこういう教養を欠くことがあってはなりません。こういう趣旨で、大阪大学では近年、とくに高学年・大学院での「教養」教育に力を入れています。

同時代の社会においてその《価値の遠近》を正しく見据えるために、大学には（過去から学ぶ）歴史学があり、（原理から考える）哲学があり、（財の配分やその段取りを考える）経済学や政治学があります。その一方には、そういう価値の実質をなすさまざまな科学理論や先端技術があります。それらを重ねあわせ、それらを駆使して、大学というところは社会の一種のモデル事業を他に先立って展開しなければなりません。たとえば「男女共同参画」が問題になるときは、その新しいモデルを設計し、それを実験的に実行に移さなければなりません。環境対策が問題となるときは、そのモデルとなるようなキャンパスにしなければなりません。「明後日」を迎えるための作業は、既存のフォーマットの上でなしえません。それを迎えるための作業そのものが、新しい未知のフォーマットの模索でなければなりません。仕事の仕方を変えるためには、それについて相談し、準備をする仕事のやり方自体がすでに変わっていなければならないのです。そういう模索をすることも、研究においてと同様、大学が「明後日」を思い描く作業なのです。

研究職について述べてきたことは、教育職についてもまったく同じように言えます。教育とは「明日」を担う人を育てるということであり、その「明日」を担う人たちはその人たちにとっての「明日」、つまりはわたしたちにとっての「明後日」と格闘するはずの人たちだからです。教育については日頃よりよく語っておりますので、ここでは事務職の人たちについても同じことが言えることを強調しておきたいと思います。

ように「上」からの指示を待つという働き方は法人という組織のかたちになじみません。職員の方々には、何を強化し、何を廃止するかを立体的に考えることが求められます。いいかえると、「明日」の目標ではなく「明後日」の大学のあり方をつねに見据えつつ、言われたことをこなすだけでなく、全体に

いま何か欠けているのか、何が滞っているのかを考えながら、一人ひとりが創意工夫をし、そのアイデアを実現する「エキスパート」というものになってもらわなければなりません。一言でいえば、「こなす」仕事・「処理する」業務から、「取り組む」仕事への転換です。そうして、現状のままで体制を維持するのが困難になる時こそ、その転換をなすチャンスであるとも言えます。知恵を出し合うことで、この困難な時をむしろ好機に転じていただきたいと思います。食事だって「済ます」食事は味気なく、やはり「じっくり味わう」食事のほうがはるかに美

味しいはずです。

そのために必要な感覚とは、「気が利く」あるいは「気配りができる」というものではないかと思っています。指示された業務をこなすだけで、動く全体をいつも見ている。そしてかすかな徴候や変化や含みを見逃さない。そしてそのうえで同僚や上司に進言したり、ときには進言するまえに裏でこっそりやっておく……。そういう「気の利く」職員が一人でも増えれば、大学は「明後日」においてもきっと社会に不可欠の存在でありつづけるだろうと思います。

大阪大学活動方針2010

もう紙幅がなくなりましたが、最後に大阪大学の「明日」についても少しふれておかねばなりません。

大阪大学が「明日」、つまり来年度に目標とする事業について、詳しくは、近いうちにみなさん一人ひとりにお届けする「大阪大学活動方針2010」をご覧ください。ここではそれらの目標のうちからとくに集中的に取り組む課題を、以下に挙げておきます。

教育については、大阪大学の第三番目の教育目標である「教育の国際化」を大きく加速することになっています。まずはG30。この事業に取り組むなかで、同時に本学学生の海外留学と英語能力の向上に取り組みたいと思っています。このこととも切り離せないこととして、旧大阪外国語大学との統合の成果

を検証し、外国語学部をもつ大阪大学の教育の国際化を新しいかたちで設計していきたいと思っています。

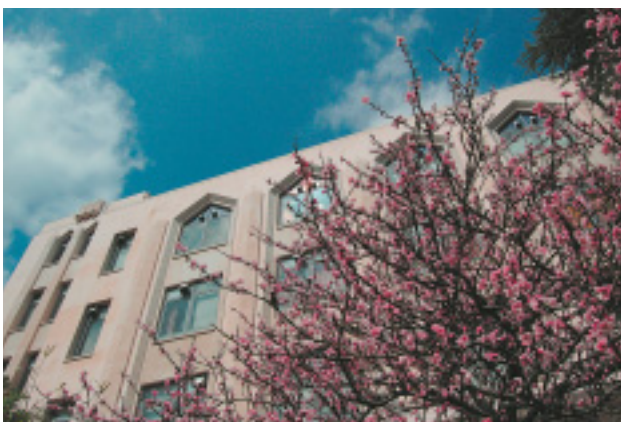
次に、研究については、その全学的な支援体制を強化したいと考えています。そのために去年は科研費申請相談員の制度を設けるとともに、「大型教育研究プロジェクト支援室」を設置しましたが、その機能強化と拡大とを図ることにしています。

三番目に、大学の財務基盤の安定化のためにスタートした「大阪大学未来基金」事業を今年は大きく飛躍させるべく、活動を活性化する計画です。

そして最後は、来る2011年5月の「創立80周年記念事業」の実質的な準備作業を確実にこなすということです。これはすでに昨秋より動きはじめておりますが、なかでもイ号館を「大阪大学会館」として改修・整備するための募金活動に、ことしは全学をあげて取り組むこととなります。

大阪大学のさらなる飛躍のために、本年もどうぞよろしくお願いいたします。

大阪大学総長
鷹田 清一



記念講義

平成22年3月31日限りで定年等により退職される教授の記念講義を、日程等が決まったものについてお知らせします。

部局(講座・部門等)	氏名	日時・場所	講義題目
医学系研究科 予防環境医学専攻社会環境医学 講座環境医学教室	森本兼曩	2月23日(火) 15:00~16:30 医学部A講堂	ライフスタイル医学の愉しみ
工学研究科 マテリアル生産科学専攻材料 エネルギー理工学講座	碓井建夫	2月17日(水) 13:00~14:30 工学研究科R1棟311講義室	お世話になった阪大45年を振り返って - 輸送現象と資源・環境調和型製鉄の基礎研究 -
工学研究科 機械工学専攻知能機械学講座	古荘純次	3月6日(土) 13:00~14:00 銀杏会館3階大会議室	ロボティクス・メカトロニクスに關 する研究からその実用化に向けて - 上肢リハビリ支援ロボットの研究開発 -
情報科学研究科 情報数理学専攻計画数理学講座	石井博昭	1月28日(木) 14:40~16:10 情報系先端融合科学研究棟 1階B101教室	多様な繋がり(人, 研究)
超高压電子顕微鏡センター	森博太郎	2月12日(金) 14:00~15:30 銀杏会館3階阪急電鉄・三和銀行 ホール	電子顕微鏡による材料研究40年

平成21年度 大阪大学卒業式・大学院学位記授与式

今年度の卒業式・大学院学位記授与式を次により挙行いたします。

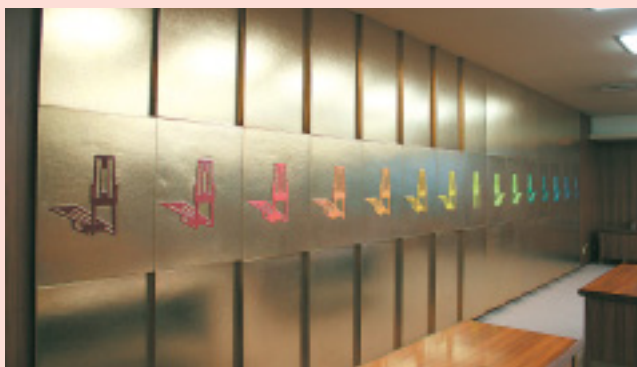
日時：平成22年3月23日(火) 11時30分~13時00分 (10時00分入場開始 11時00分入場完了)
場所：大阪城ホール(JR環状線「大阪城公園」駅下車 徒歩5分)

開始30分前までに入場完了願います。遅刻された場合、会場への入場をお断りする場合がありますのでご注意ください。

同伴者の方は2名までとさせていただきます。入場には整理券が必要になります。

車での来場はご遠慮下さい。

問い合わせ先 総務部総務課総務係 TEL:06-6879-7014



表紙写真：陶壁画(大学本部棟401会議室)(縦2,860mm×横9,050mm)

1980年3月の事務局庁舎(現在の大学本部棟)竣工当時から401会議室に設置されている陶壁画であり、建物の設計に際して、建物の機能性に加え、文化性、芸術性が取り入れられていることが分かります。

作者の木村光佑氏は1936年大阪府生まれで、京都市立美術大学(現・芸術大学)日本画科卒業。日本、ポーランド、アメリカ、イギリス、旧ユーゴ、ノルウェー、韓国等の国際美術展で版画、彫刻で大賞などを受賞。大阪大学のほか、京都工芸繊維大学、神戸商船大学、川端康成記念館、阪急茨木市駅、神戸国際文化会館、茨木市庁舎などに壁画、モニュメント等を制作しています。

表紙デザイン：株式会社ココティエ

阪大NOW No.115 2010 1月号 2010年1月20日発行

編集 大阪大学広報・社会学連携室
発行 大阪大学企画部広報・社会学連携事務室 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1
TEL:06(6879)7017 FAX:06(6879)7156
ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp/>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。
E-mail: kikousyagakukouhou@ns.jim.osaka-u.ac.jp